

昭和四十二年大会への提案

1 山岡 榮 市

自由報告やシンポジウムを通じて、誰も「むらとは何か」について考えている訳ですが、この目標に到達するためのいくつかの視点を設定し、それぞれの視点を刻明に追求して行くような自由報告が望ましいと思います。今までの大会報告では資料の提供に片寄りすぎて本質的究明のための討議が充実していません。二、三の分科会方式→全体討議（という方法をとること）、（四）、また開催地における村落研究の発表を願うこともよいかと存じます。その際、村研メンバー以外の隣接科学の研究者の御登場を願う。（というやり方を提案します）

2 後 藤 和 夫

年報の発刊が大会の少なくとも一ヶ月前に会員の手にするこ
とのできる時期になるようにしたい。本年度は折角の企画が――あ
とで拝見しましたが――残念でした。

四十一年度大会では報告、討議ともに、共同課題について充分ふ
れていなかったと考えます……というのも課題の決定がおそきに失
したことが原因でないでしょうか……決定した課題をもっと早く
より詳細に会員に伝えることを対策として立てる必要がある。